

# 国際シンポジウムに参加して

藤 本 英 人

今年の4月にアメリカのワシントン州立大学 ( Washington State University, 略称は W S U ) で行われた第23回国際パーティクルボード / 複合材料シンポジウム ( The 23th International Particleboard / Composite Materials Symposium ) に参加して参りました。ワシントン州立大学は名前が示す通り、西海岸のワシントン州 ( 東海岸のワシントン D . C . ではなく ) のプルマン ( Pullman ) という小さな町にあります。私自身も行くまではどこにあるのかも知らなかったのですが、地図を広げてみるとプルマンはアメリカの北東部、カナダとの国境に近いところに位置します。ロッキー山脈を控えて、林業や林産業の盛んな地方です。ワシントン州立大学は写真からもわかるとおり、広大な敷地にレンガ造りの建物が建ちならぶ非常にすばらしい環境の中にあります。

日本人も外国でどんどん活躍する時代になっています。今後、国際学会等に参加を考えていらっしゃる方の参考になればと思い筆を取りました。

ところで、シンポジウムとは一体どういう会なのでしょう？ 似たような会には学会大会 ( 一般に学会と言われているのがこれです )、討論会、コンファレンス、フォーラムなどいくつかありますがその差はどこにあるのでしょうか。三省堂出版の大辞林という事典によりますと、シンポジウムとは

数人の人が意見を発表し、それについて聴衆の質問に答える形で行われる討論会となっています。これが私の今回の最大のミステ



写真1 ワシントン州立大学のキャンパス

イクにつながりましたが、、その話は後ほど.....。

## 1. 経 緯

このシンポジウムについてはかなり以前から知っていました。特にその要旨集はかなり立派なもので、林産試験場の図書室でも毎年1部購入しています。その要旨集を見ながら、機会があればこのような場で研究の成果を発表したいものだと考えておりましたが、生来のなまけものということもあり、きっかけがつかめないまま時間がたってしまいました。

そんな折、京都大学の木材研究所でパーティクルボードの研究をされている川井先生が木材学会大会出席のため7月に旭川に来られました。川井先生と雑談を交わしていると、先生はそのシンポジウムに参加されるとのことでした。それならと私も申し込んだのがことのはじまりです。

## 2. 申込み

さてそこで申し込みです。私の場合はシンポジ

ウムのディレクターであるマロニー教授に手紙を出しました。もちろんすべて英語です。内容は以下のとおりです。

拝啓 マロニー教授：

第23回パーティクルボード/複合材料シンポジウムに下記の内容で発表したいのでよろしく申し上げます。

タイトル：耐水性パーティクルボードの製造  
著者：藤本英人，穴沢 忠，山岸宏一  
要約：.....

ただし、このシンポジウムは特に申し込みの書式が決っていないために手紙で申し込みをしたものであり、学会によっては書式が決っているものもありますので注意が必要です。

どこで、いつ、どんな学会があるかを調べるためには学術雑誌の学会記事の部分を注意深く見て下さい。Holzforschungなどにはかなりたくさんでています。

さて、私がマロニー教授に手紙を出してから3週間ほどたってから返事がきました。「もうすでに講演者はほとんどすべて決定している。しかしながら、貴君の講演を組入れるように努力する。」とのことでした。翌年の4月に行われるシンポジウムの講演予定者が8月にもうほとんど決っているとは驚きでした。それからしばらくは何の連絡もなかったのですが、11月に入って、「講演者として参加してほしい。」との連絡が入りました。

さあもう逃げられません。急いで英会話のカセットを買ってきて聞いてみました。ところが、ほとんど聞き取れません。こんなはずではなかった、学生時代にもっと英会話を勉強しておくべきだったと後悔しても後の祭りです。やるしかないということで、買って来たテープを通勤途中の車の中で聴くことにしました。しかし、前にも書いたとおり生来のなまけもの、つついおもしろいラジオの番組になってしまいます。特に、帰りがけは

私の大好きな小沢昭一の「小沢昭一的こころ」があります。11月、12月はまだ時間は十分あると思って、1月、2月はその惰性で、3月はあきらめで、結局はほとんど聴かないまま出発の日を迎えてしまいました。

### 3. 手 続

12月になると講演者用の37ページにもおよぶ資料が送られてきました。これは日本の学会などとはかなり異なる点であると思いますのでちょっと詳しく紹介したいと思います。

まず、1～3ページには講演者（パネリスト）に対する案内、注意事項などが細かく書いてあります。シンポジウムの開催日時、場所に始まり、講演時間が40分であること、要旨集を後日印刷するのでその原稿を提出すること、その原稿は Helvetica 12, Prestige - Elite（それぞれタイプライターの字体）などを用いてダブルスペースで打つこと、図表は必ずオリジナルを用いて決められた大きさに書くこと、単位はMK S系（kg,メートルなど）を用いることなど細かく指示されています。日本ではシンポジウムのパネリスト（講演者）にこれだけ懇切丁寧に指示することはまずあり得ません。

その後のページには宿泊の申し込み、パネリストの略歴の記入と続きます。いかにもアメリカらしいと思ったのは、著作権の譲渡契約書でした。前述のとおり、シンポジウムの後で要旨集が出版されますが、この中の論文の著作権は主催者であるワシントン州立大学に属することに合意した旨をサインして提出しなければなりません。日本では現在のところ著作権という概念があまり発達していないためか、あるいは文書化するという堅苦しさを嫌うためかこのような大げさなことをする学会は聞いたことがありません。

11ページ目からは原稿を書く時の注意、執筆要綱です。タイトル、要旨、脚注、図表、引用文献など細かく指示されています。またまたアメリカらしいと思ったのですが、原稿は原稿用紙に書いて送るより、ワードプロセッサ（ワープロ）を用



図1 英会話ハンドブックを片手に出発！



写真2 ワシントン州立大学の木材研究の中心  
リサーチアンドテクノロジーパーク

いてフロッピーディスクで送ってほしいと書いてありました。さすが情報先進国です。ただ、残念ながら指定されたワープロソフトは私どもの試験場にはありませんでした。そこで、別のワープロソフトを使って書いて、手紙で確認の上、MS-DOSのテキストファイルに変換して送りました。

#### 4. 渡航

さて、いよいよ渡航の日が近づいてきました。発表の準備、パスポートなどの手続、英会話の練習など、しなければならぬことが多くて、とにかく大変でした。どうにか片付けていよいよ出発の日、3月31日になりました。この3月31日というのもミスタイクでした。この話も後でしたいと思いますのでよろしくおつきあいください。

期待1割、不安9割の気持で旭川空港を昼過ぎの飛行機で羽田に向け飛立ちました。その時、見送りに行くといって約束してくれていた成形科長を初めとする科の面々の顔が見当たりませんでした。なにか急用でもできたのかと思っていましたが、帰国してからその時の事情を聞いて納得しました。彼等が見ていた時刻表は2月のもので、彼等が空港についた時にはすでに私の乗った飛行機ははるかかなたを飛んでいたのです。ミスをするのは私だけではないようで……。

羽田からリムジンバスで成田国際空港まで、途中でテロ対策の厳しい検問を通過して、到着しました。バスの中では英語の練習にはげもうと思っ

て、東洋系の若い女性に話しかけました。私の英語の聞き取りが正しければ、彼女はフィリピンからの出稼ぎで、これから仲間と一緒に故国に帰る途中だそうです。ジャパユキさんの話はテレビなどで良く見聞きしますが、本当に増えているのだと実感しました。

さて、旭川の自宅をでてから8時間半、やっとアメリカ行きの飛行機に乗り込みました。後は、ただの酒を飲んで、機内食を食べて、眠っていればアメリカに着きます。所用時間は約8時間、国内の移動より少ない時間で、そして31日の夜8時30分に飛立ったはずなのに、日付変更線の関係で、その日の昼過ぎにアメリカのシアトル・タコマ空港に到着しました。

ここでアメリカで最初のトラブルに遭遇しました。そこからワシントン州立大学のあるプルマンという町まで Horizon Air line の飛行機で行くことになっていましたが予定していた飛行機に間に合いませんでした。プルマンの飛行場にはワシントン州立大学関係者が出迎えに来てくれることになっています。電話で次の飛行機にのる旨を連絡しなければなりません。経験のある方ならお分かりいただけると思いますが、面と向っての会話より電話での会話はその何倍も難しいのです。それでも意を決してかけようとするのですが、市外局番を回してもつながりません。テープに録音された声で1ドル50セント入れて下さいと言うメッセージが返ってくるばかりです。もう一度1ドル50セント入れてからかけなおしても同じメッセー

ジが返ってくるばかりです。仕方なく通りすがりの人に尋ね、やっと分りました。日本では最初から10円玉か100円玉を余分に入れてかければ良いのですが、アメリカの場合はそのメッセージがでた後で投入しなければならないのです。やっと電話がつながったのでこちらの言いたいことだけ言って電話を切りました。先が思いやられるアメリカ第一歩でした。

次に乗った飛行機は双発の、見たところ30人乗りくらいの、プロペラ機でした。直行便があれば良かったのですが残念ながらSpokane経由の便でした。Spokaneでまたまた乗換えました。今度は10人乗りの単発の飛行機でした。座席は左右それぞれ1列で、非常に狭くて、大男のアメリカ人がきゅうくつそうに座っていました。もちろんスチュワーデスは乗っていませんでした。ちょうど狭いマイクロバスに乗っている感じでした。操縦室と客室の間のドアは開け放してあって、機首の前方まではっきり見えました。前が見えるということは、離陸や着陸の時、あるいは雲の中を長い時間飛ぶ時などあまり気持ちのいいものではありません。ジャンボ機などのように前が見えない飛行機の方が安心して乗っていられます。ともあれ 私の乗った飛行機は無事にプルマン空港に着陸しました。プルマン空港は、想像していたよりはるかにこじんまりした、まるで草原の中に直線の道路があってその横にバスの停留所のような建物があるだけの施設でした。まさかこのような空港があるとは想像していなかったもので、出迎えてくれるワシントン州立大学関係者に以前書いたトンチンカンな手紙の内容を思い出しておかしくなりました。その手紙にいわく、人込みの中で私を見つけ出していただくために私の外見的特徴を書きます。身長は179cm、痩せがたで眼鏡をかけています。髪の毛および目の色は黒、典型的な東洋人です。などなど……………。出迎えてくれたバックカス博士、「親切な手紙有難う。おかげですぐにわかりました。」とのこと。それはそうでしょう。空港に降り立ったのはわずか5人、東洋人は私1人。これなら手紙などなくてもすぐにわかります。私が想

1989年12月号



写真3 シンポジウムの開催されたコンプトンユニオンビルディング

像していたのは旭川空港クラスの規模で、飛行機ももっと大きなものでした。でもアメリカではこのような小規模のコンピューター空港がかなり発達しているのです。そしてちょうど長距離バスや特急列車にのるような感覚で飛行機を利用しているようです。運賃も日本に比べると非常に安いと感じました。

プルマンの町は人口約3万人程度の小さな田舎町でそのうちかなりの割合がワシントン州立大学の学生、職員といった大学の町です。ホテルなどの宿泊施設もあまりなく、一部のシンポジウム参加者はとなり町の Moscow のホテルに宿泊しているとのことでした。

## 5. プルマンでの思い出

さて、ようやくのことでプルマンに着いたのですが、ここでまたまたミスタイク。着いたのが金曜日の6時すぎ。宿泊したのが大学の構内にあるコンプトン ユニオン ビルディングという大学関係の宿泊施設。ホテル内のレストランは6時で閉ってしまい、月曜日まで開きません。空きっ腹をかかえて途方にくれました。ホテルのフロントで近くにレストランはないか尋ねました。レストランはいくつかあるが、歩いて行ける距離ではないこと、ハンバーガーショップなら近くにあることなどを地図を書きながら丁寧に教えてくれました。仕方なくそれから月曜日の朝までずっとハンバーガーを食べて生き延びました。まさにアメリカのアメリカらしい食生活を満喫しました。大学



図2 アメリカではサマータイム

の構内の宿泊施設を利用される方は到着日時とホテルのレストランの営業時間に注意された方がよいと思います。

さて渡航のところで書きました「3月31日のミスタイク」について。4月2日の夕方にマロニー教授のお宅に呼ばれていきました。4時に私が泊っているホテルまで迎えに来ていただくことになっていました。さてその当日、なんと3時すぎにフロントから電話がありました。「約束の時間になっているがどうしたのか？」とのことでした。あわててフロントに行ってみるとマロニー教授がいすに腰をかけて待っていらっしゃいました。私が「約束の時間は4時のはずですが.....」と言うと、「今4時です。昨日からサマータイムになりました。」と言われました。日本ではそういう習慣がないのですが西欧諸国にはサマータイムというものがあります。これは夏の間は昼の時間が長いので、皆で時計を1時間進めて早くから仕事を始め、1時間早く終り、午後の時間を有効に使うため考え出されたとのことでした。私がアメリカに着いたのは3月31日、4月1日からすべての時計が1時間進められていたのです。このころにアメリカやヨーロッパへ行かれる方は十分に注意して下さい。

ところで日本とアメリカは時差があります。日本が昼ならむこうは夜です。長旅の疲れと時差ぼけのため全く頭が働きません。それを見越して早目に着いたのですが、シンポジウムの開催される

日までに回復するかどうか心配です。できるだけあちらの時間で規則正しい生活をするように、心掛けたのですが、やはりベッドに入っても眠りにつけず真夜中になると自然と目がさめてしまいます。とうとう発表の日になっても回復しませんでした。

## 6. シンポジウム

シンポジウムは4月4、5、6日の3日間行われました。4月3日の夜には別のホテルで受け付けおよび簡単な立食パーティがありました。見ず知らずの人とお互に話をしようとするのですが一体なにを話しているのかとまどうばかりです。おまけにすべて英語。別行動をしていて、その会場で出合った京都大学の川井先生からアドバイスを受けました。「こういう席では自分の研究を話すことも必要であるが、それ以上に、人の話を聞いて理解できるようにしておく必要がある。そのためには自分の専門の狭い領域だけでなく、関連の分野についても幅の広い知識が必要となる。これは今後独立した研究員として、自分で研究テーマを探して、研究を進めて行く上で極めて重要な要素になる。」とのことでした。まさにそのとおりだと実感した次第です。

さて、かんじんのシンポジウムですが、会場は500人程度が入れる講堂のような、あるいは映画館のようなといった方が適切なような場所で行われました。発表および質疑応答はもちろんすべて英語のみ、同時通訳などはいっさいありません。さて、最初に述べた最大のミスタイクについて述べたいと思います。シンポジウムが一般の学会発

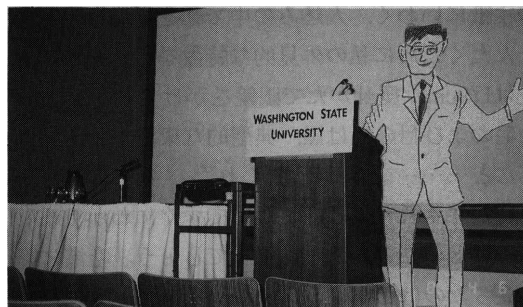


写真4 シンポジウムでの発表

表と異なるのは、前述のとおり、学会は発表に重点が置かれるのに対して、シンポジウムは発表後の討論に重点が置かれる点です。日本語でなら討論もできますが英語、それも標準語でない英語で質問されても質問の意味がわからなく、ぜんぜん答えられません。けっきょく討論らしい討論もなしに終わってしまいました。後になってあの質問者はこの点について聞いたかったのかとか、あの質問に対してはああ言えば良かった、ここはこういう表現にしておくべきであったと悔やまれるばかりです。私の語学力ではシンポジウムはもともと無理で、するとしたら一般の学会発表にしておくべきであったと反省しております。その場合でも予想される質問、これは日本の学会での質問とそんなに変わりませんから、それに対する英語での答えは準備しておくべきだったと思います。

会場で他の外人の発表者の講演を聞いていて感じたことを一つ。プレゼンテーション（発表）の技術は、私にとってかなり参考になりました。日本の研究者は、と言っても一流の研究者は別として、発表そのものにあまり重点を置かない傾向にあるような気がするの私だけでしょうか？日本人研究者は一般に研究熱心です。常に手を動かしていないと気がすまない人が多いのはたしかです。研究の結果もどんどんでています。しかしながらそれを発表する時の熱意はそれに比べるとどうも……。日本木材学会大会などで学会発表がすんだ後、個人的に話をしていると、「あまり発表した

くなかったのだけれど」とか「全部理解されると困るからスライドは分かりにくくした」などと言う人がありました。これはあまりにも極端な例として除外するにしても、発表の熱意、そしてテクニックは外国人研究者に比べて劣っている人が多いように思います。

多くの、もちろん全部ではありませんが、外国人研究者及び日本人の一流とよばれる研究者の発表のテクニックは非常に優れたものです。どうすれば自分の研究の成果をできるだけ多くの人に正確に分かってもらえるかに心を配っているように見受けられます。私もこの点には配慮してスライドを作ったつもりですが欠点を指摘されました。これは後に親しくなったあるアソシエートプロフェッサー（準教授）から指摘されたのですが、**図3**を見ておわかりいただけるでしょうか？英語のスペルの間違いとか図がきたないとか言った問題ではなく、根本的な欠点です。答えは後ほど……。

さて、発表のテクニックですが、参考になりそうな点を2～3あげてみたいと思います。

まずスライドは極めて鮮明で、エッセンスのみ、余計なものはいっさいありません。日本の学会発表でよくみかける細かい数字をびっしりと書込んだ表はありませんでした。原則として表は避けて図にする。やむを得ずに表にする場合でも表はできるだけシンプルにして、説明しない数字は書かないなどの配慮が必要でしょう。

次にスライド原稿はすべて表はもちろん図中の単位等も含めてタイプ打ちで、手書き（ロットリングを含む）はありませんでした。ちょうど論文中の図表をそのままスライドにしたような感じです。これはコンピュータと最新のワードプロセッサソフトを駆使して、いわゆるDTP（デスクトップパブリッシング）で作製したそうです。それらの設備をもたない発表者のためにはシンポジウムの事務局で、手書きの原図を送るとDTPでスライド原図を作るサービスをしてくれました。日本でも良いDTPソフトが出回りつつあります。どしどし利用したいものです。

最後に、ある発表者は演壇にハンドヘルドのコ

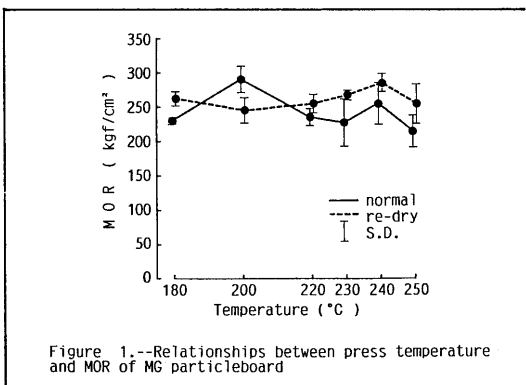


図3 欠点を指摘されたスライド

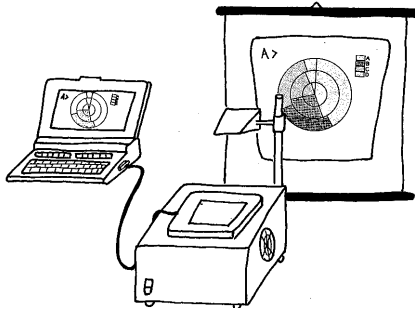


図4 コンピュータ画面をOHPで投影

ンピュータを持ち込み、コンピュータ画面をOHP（オーバーヘッドプロジェクター）にかけける装置（プレゼンテーションディスプレイパネル）を用いてスクリーンに投影していました。発表の内容は工場のコンピュータ制御に関するものでしたが実際の画面を見ながらの説明は非常にわかりやすいものでした。また グラフについても動きを演出することができたり、強調するところを点滅させたりできます。かなり効果的な発表手段と思えました。日本でもこの装置は市販されており、値段もそれほど高価なものではありません。今後使ってみてみたいと思う装置の一つです。

このように、発表には最新の情報機器を駆使して、いかに自分の言いたいことをわかってもらうかに努力していました。見習いたいところです。

そこでさきほどの私のスライドの致命的な欠点についての答えですが、「自分の言いたいことをわかってもらう努力が足りない」ところにあります。具体的に言いますと、「単位」です。アメリカでは今でもメートル法（cm や kg）のかわりにヤード法（インチやポンド）が一般的に使われています。温度も摂氏（ $^{\circ}\text{C}$ ）ではなく華氏（ $^{\circ}\text{F}$ ）です。研究者のうちでも物理系や化学系の研究者はメートル法（MKSまたはCGS単位系）に慣れています。特に木材関係の研究者の間ではインチ、ポンドあるいは華氏です。したがって私がMKS単位系で話した場合、彼等は頭の中で換算しなければなりません。論文でならば脇に換算表を置いておけば あるいは電卓を置いておけば全く問題がないのですが、講演ではそうはいきませ

ん。結果的に私の話を理解しようとしてくれなくなります。ではどうしたら良いのでしょうか。私がインチやポンドで図表を作っておけばそれでも良いでしょう。でもそれではアメリカ人にはわかりやすくなりますが他の国の研究者には理解しにくくなります。現実にはフランスやドイツをはじめとするヨーロッパ、韓国や中国などのアジア諸国からも大勢参加しています。また、「手続」のところでも述べたパネリストに対する案内・注意にはメートル法（MKS単位系）が望ましいと書いてあります。したがって、答えは「縦軸または横軸を一本加えてヤード・ポンド系の単位を書き加える」でした。注意書きにMKS単位系が望ましいと書いてあるのだからそんなことは必要ない、そこまで迎合する必要はないと思われる方も多いと思いますが、そこが私がさきほど書いた「わかってもらう努力」です。これは一つの例です。どうすればわかってもらえるかということに常に考えて、心配りをする努力が必要と考えます。

国際学会に参加することにより、具体的な発表のテクニックを知り、このように今まで気がつかなかったことを発見し、さらにすばらしいことに、世界的に有名な先生方、若手の第一線の研究者と知り合いになれば、私にとってこの経験は今後研究生活を続けて行く上で非常に有意義であったと思います。

## 7. あとがき

旅の恥はかき捨てとはいいますが、アメリカまで出かけてたくさんの恥をかいてきました。でも私にとって非常に良い経験でした。皆さんも軽い気持ちでぜひ海外の学会に出かけられたらいいのではないでしょうか。海外への航空券は探せば思いもかけないほどの安い値段で手に入ります。宿泊も日本のホテルよりかなり安いところもたくさんあります。それでこのように貴重な経験ができるのです。ぜひ一度軽い気持ちで参加してみられることを勧めます。私もまた来年のシンポジウムに参加（今度は聞くだけ）する予定にしております。

（林産試験場 成形科）